027

After Century

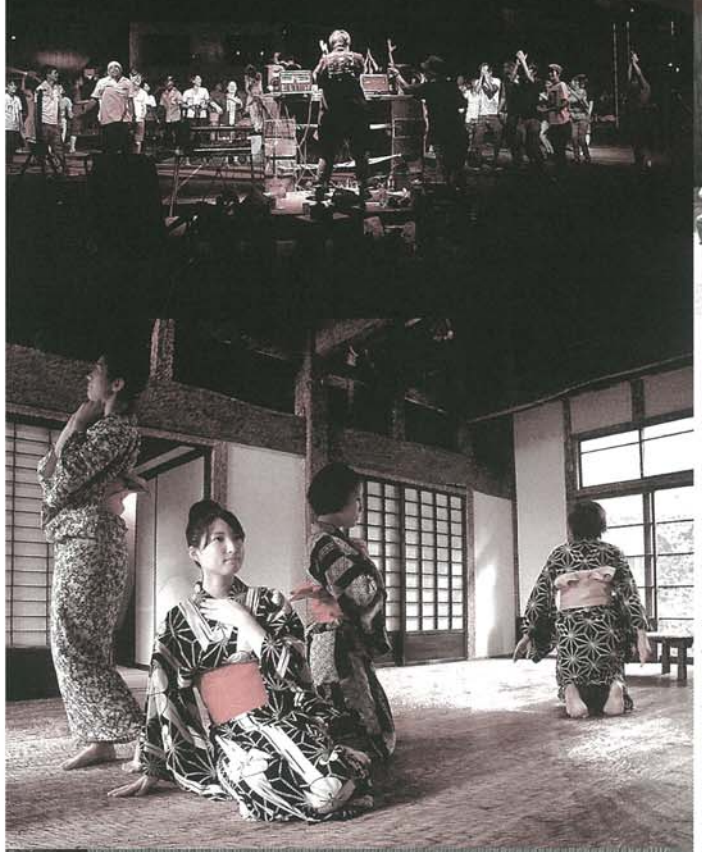
Art Campus

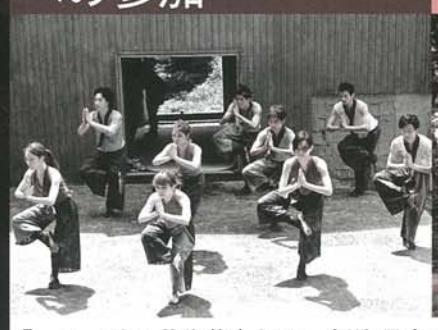
Photography
Cinema
Fine Arts
Music
Literary Arts
Theatre
Broadcasting
Design

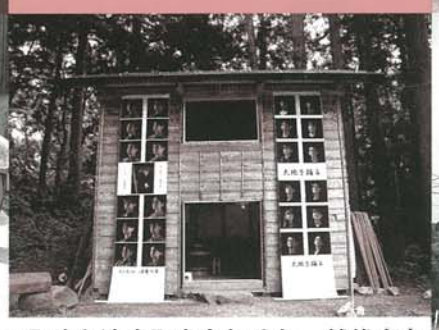
Topics

大地の芸術祭

越後妻有アートトリエンナーレ2012への参加







「大地の芸術祭」とは、新潟県十日町市と津南町を合わせた、越後妻有地域の里山を舞台に繰り広げられる世界最大規模の国際芸術祭です。東京23区とほぼ同じ面積の中に、たくさんのアート作品が点在しています。つまり里山全体が美術館になるわけですが、美術そのものの成功というよりも、アートを媒介とした地域の魅力やそこでの協働を目的とし、それらを世界に発信し、地域再生を目指しています。

今年も7月29日～9月17日まで開催され、5回目となる今回は367点の作品数に、参加アーティストは44の国と地域310組に及び、前回を大幅に上回る約48万人の来場者を迎えて幕を閉じました。

日藝からも美術学科彫刻コースの有志を中心に、これまで参加した芸術祭を上回る学生、教職員、卒業生約170人が参加し芸術祭を盛り上げました。

芸術祭では毎回新しいプロジェクトが行われ、今回の目玉の一つにコミュニティ・デザイン・プロジェクトがあげられます。

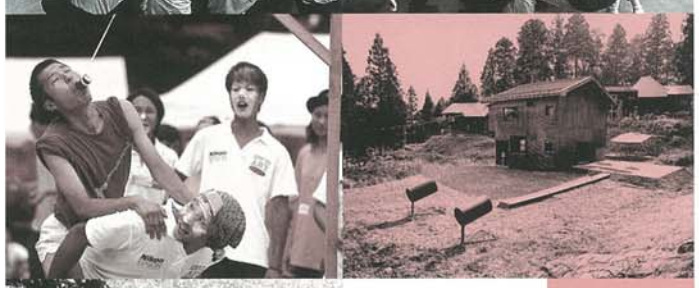
これは芸術祭の一つの特色である地域住民とアーティストが協働して作品に取り組むという試みからきています。過疎化・高齢化に悩む集落では、集落を維持するための活動や年間行事の存続が難しくなっており、この問題に取り組むというもので、2004年から続く日藝の長期的なプロジェクトも、継続的に地域のコミュニティに根ざしたとして評価されています。

彫刻コース有志は2006年に空家を彫り尽くした〈脱皮する家〉を発表。続く2009年には空家に金属を吹き付けた〈コロッケハウス〉を発表しました。2012年の今回はコロッケハウス裏の土地に6mの舞台と9mの花道を設置し、全体のイベント等の運営を行いました。〈やまのうえした〉と題した今回の作品は峠という集落の名前にちなんでおり、その名の通り、集落全体を作品の舞台としました。

舞台では、音楽会をはじめ、峠の祭り、演劇学科有志の創作舞踏を披露。写真学科有志は全集落の方々のポートレートや花の写真を旧小学校、きゃっしー会館と呼ばれる公民館に展示しました。文芸学科有志は峠集落の観光ガイドとなる「やまのうえした」を刊行。映画学科と写真学科の有志による蔵の2階を使ったインスタレーション。音楽・映画・放送学科有志による農舞台レイブ、コロッケハウスを使った里山サウンドスケープなど、その他にも多数のワークショップを行い、前回にもまして学科を超え学内での協働も増えました。

ほとんどのイベントを日藝内の協働によって作り上げた今回の芸術祭は更なる3年後にむけて心地よくハードルをあげたように思います。

美術学科教授　鞍掛純一



やまのうえした

その一歩が道になる。

一歩を踏み出す勇気を持とう。
小さな一歩が十歩になり、百歩になり、
それがやがて夢に続く道になる。

「伝える」ために、このワンカットにこだわり続ける。

映画学科 撮影・録音コース 4年

山崎真依子さん

■諦めきれなかった、映画への道

映画の道に進みたいと家族に伝えたのは、高校3年の秋。共に公務員で、我が子には安定した道を進んでほしいと願っていた両親は、驚き、反対した。しかし、考えに考えを重ねて出した結論。どんなに反対されても、その思いはゆるぐことはなかった。

「安定した仕事に就きなさいとずっと言われていたので、映画が好きという気持ちを自分の中で抑えていました。小学校から高校までバスケットをやっていて、高校時代は神奈川県のベスト8になった経験もあるので、それを生かして体育の教師や整体師になる道もありましたが、どうしても映画の道をあきらめることはできませんでした。やらなくて後悔するより、やって後悔するほうがいい…そう思いました」。

日藝に入学した当初は女優になりたかった。そんな彼女は、なぜ撮影録音コースを選んだのか。「カメラや照明など技術的なことを知っていれば、演技一つにも深みが出ると思ったんです。せっかく大学に進むのだから、技術を身につけたいという気持ちもありました」。

映画は、役者や演出、照明、カメラなどさまざまなものが一つになって創り上げる総合芸術である。最初から役者としての道を選ぶのではなく、映画という世界をより深めるために、まわりを固めようと思ったのである。

■挫折を乗り越え、「コダック賞」受賞

山崎にとって印象深い作品がある。それは、2年の実習で制作した「ある男」という5分の作品である。彼女が題材にしたのは、性同一性障害を乗り越えて、女性から男性になったバスケット部の先輩。高校時代から大好きだった先輩のためにもいい作品を創りたいと思っていたが、結果は思うようにいかなかった。

審査を担当した先生の言葉は、今も心に残っている。「伝えたいという思いは見えるが、残念ながら観る側に伝わってこない。どうすれば伝わるかをもっと勉強しなさい」。伝わらなかったという現実を突きつけられて悔しくて、悔しくてたまらなかった。そして、その日から彼女は変わった。映画を創ることに、今まで以上に真剣に取り組むようになったのである。

「観る人に伝えるために、俳優の顔をアップで撮るにしても、なぜアップにすべきなのかをワンカットごとに考えるようになりました」。

ワンカットへのこだわりを追求して創り上げたのが、3年の実習で同じ学年の監督、録音とトリオを組み、撮影を担当した2本の作品である。この時、山崎は納得しなければ決してカメラを回さなかった。監督と意見がかみ合わず、現場で激しく意見をぶつけ合うこともあった。ワンカットには必ず理由がある…その一心で撮った2本の作品は、「映画学科コダック賞」を受賞。伝えようという彼女の思いが、ようやく実ったのである。

■学んだことのすべてを卒業制作に

映画学科コダック賞の副賞として手にした2000フィートのフィルム。3年の時、このフィルムを使った卒業制作の合間をぬって、二ヶ月間、商業映画の現場に撮影アシスタントとして参加したこともある。この時、知ったのはプロの世界の厳しさ。何もできず、撮影助手に毎日のように怒鳴られた。雪が止むのを待つために極寒の中、8時間もカメラの横で待機したこともあった。何度、逃げだそうと思ったことか。「その映画のカメラマンは、日藝で講師をしている川上皓市先生でしたが、先生に泣きながら弱音を吐いたこともあります。その時、先生に“誰も何も期待していないのだから、できなくてもいい。それより、プロの技術や動きを勝手に盗んでいきなさい”と言われて、ふっと肩の力が抜けました」。

高校時代はバスケット部の部長として、監督から期待されていた。大学に入ってからも、親の反対を押し切って入学したのだから、期待に応えなくてはならないとずっと思ってきた。期待されることに馴れ、それに応えようと必死に頑張ってきた彼女にとって、「期待していない」という言葉がどれほどうれしかったことか。それからはプロの仕事を盗むことに専念し、一つ一つ自分のものにしていった。

大学で学んだこと、現場で培った経験…。そのすべてを結集した卒業制作の作品は、現在、編集作業に追われている。「監督や照明、カメラマン、俳優など大勢のスタッフが一生懸命、情熱を傾けて一つの作品を創り上げる映画の現場が好き」だと彼女は言う。夢は、年を重ねても映画の現場に携わり続けること。卒業後、山崎は映画をより深く学ぶためにアメリカに留学する予定だ。映画の世界は奥深い。彼女の夢は、まず始まったばかりである。

まず、一歩を踏み出すこと。そこから新しい世界が見えてくる。

美術学科 1年

安東汐里さん

■二度目の応募で「手塚賞」の佳作を受賞

「第83回 手塚賞」で佳作を受賞した作品「ハートフルヴィランズ」。

安東汐里は日藝に入学して間もない平成24年6月、集英社主催の漫画新人賞「第83回 手塚賞」で佳作に入選した。ペンネームは安東 潮(うしお)。受賞作「ハートフルヴィランズ」が漫画雑誌『ジャンプSQ.19』vol.03(集英社)に掲載され、プロデビューを果たした。

安東が初めて漫画を描いたのは、高校3年の春。尾田栄一郎氏の人気漫画『ONE PIECE』が好きで、漫画は時々読んでいたが、ペンを握ったこともなかったし、当然のことながら漫画家になろうと思ったこともなかった。きっかけは、漫画雑誌でたまたま見た「第81回 手塚賞」の作品募集広告である。

それまで一度も漫画を描いたことがない。漫画を描くためには通常、数種類のペンを使い分けるが、そんな知識もなかった安東は、一種類のペンで人物も背景も、すべて描いたという。まさに手探りだった。しかし最初に応募した作品が「第81回 手塚賞」の最終選考に残ったことで、乗り気になった彼女は次の作品に着手。「第83回 手塚賞」で見事、佳作を受賞したのである。

■デッサンの基礎があったからこそ

漫画家を目指す人は、おそらく全国何万人もいるだろう。その中でプロとしてデビューできるのはほんの一握り。安東のように初めて漫画を描いてからわずか1年で作品が認められ、デビューを果たすことは、奇跡としかいいようがない。しかし、彼女には奇跡を掴むだけの理由があった。父親はカメラマン。中学では演劇をかじり、高校は吹奏楽に触れたりと、どちらかというとエンターテインメントの世界が好きで、美大への進学を目指して高校時代はデッサンを学んでいたのである。「たまたま高校が東京芸術大学に隣接していたので、芸大の文化祭の時は見に行くなど作品に触れる機会が多かったんですね。そんな環境だったので、美術の道に進んでみたいと思うようになりました」。

友人も家族も安東が漫画を描いていることは知らなかっただけに、受賞したと伝えた時は皆一様に驚いたという。しかし誰よりも驚いているのは、もしかすると彼女自身かもしれない。想像もしていなかった漫画家という道が、目の前に突然、出現したのだから。

■漫画家として、日藝生として

「手塚賞」は年2回行われ、次々と新人漫画家が誕生している。プロデビューを果たしたからといって、将来が約束されたわけではない。本当の勝負はこれから、である。

「今は担当の編集者の方と話し合いながら、次の作品のネーム※を描いています。ジャンプスクエアの読者層に合わせたキャラクターやストーリーを考え、編集さんの意見を聞きながら修正を加えていく…。ネームができあがっても、編集部のコンペで通らなければ雑誌に掲載されないので、日々作品づくりに励んでいます」。

当然のことながら夜を徹して作品を書き続けることもある。だが彼女は、大学の授業はできるだけ休まず、日藝生としての生活を楽しんでいる。高校時代、デッサンを学びながら漫画を描いたように、大学で学ぶこともまた、漫画を描くことにプラスをもたらすと考えるからだ。大学生であり、漫画家でもある…。安東は19歳という「今」を楽しんでいる。

ひょんなきっかけで漫画を描き、自らの手で新たな道を切り開いた安東は、最後に言葉をこう結んだ。「私自身、漫画を描くことで新しい世界を開くことができたので、興味を持ったらやってみることが大事だなという気がします」。まず、一歩を踏み出すこと。踏み出すためのほんの少しの勇気を持つことが、チャンスを掴むための唯一の近道なのかもしれない。

※ネーム：漫画を描く際、コマ割り、コマごとの構図、セリフ、キャラクターの配置などを大まかに表したラフ画。

掲載した漫画は、すべて『ジャンプSQ.19』vol.03（出版元：集英社）より抜粋。

REAL! NICHIGEI

REAL! NICHIGEIは、今年で4年目を迎える日本大学芸術学部の特設動画コンテンツWEBサイトです。「REALな日藝」をテーマに、総勢170名以上の日藝生にインタビューを敢行、アーカイブ化しました。今回、そのスペシャルコンテンツである『8学科学生対談』の撮影当日を振り返り、ダイジェストでお届けします!

2012年8月某日
@江古田校舎
写真学科大スタジオ

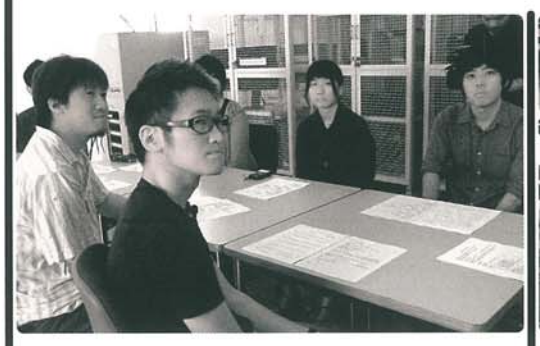
12:00 学生顔合わせ

各学科より選出された8名が写真学科大スタジオに集合。撮影の段取りを把握し、簡単な自己紹介と撮影への意気込みを語ってもらいました。皆、まだまだ緊張している様子です。

13:00 REAL × TALK

「これだけは他学科に負けない!」、「日藝のここがすごい!」などの質問にパネル形式で返答、自由にディスカッションしてもらう企画です。返答のひとつひとつに各学科の個性が見え隠れする様は必見!

REAL × TALK



Q. これだけは他学科に負けない!

文芸学科MNさん(以下=文):文芸学科は妄想力ですね。
全員:(笑)
演劇学科NTさん(以下=演):こわい、こわい、こわい(笑)。
文:物語を作るのも、雑誌の企画を立てるときにも、妄想力は必要です。文芸学科の皆、妄想力はすごいですね。考える人が多いので本当に負けないです。
放送学科TKさん(以下=放):例えばどんな妄想?
文:私の場合は、美脚男子に回し蹴りされたいとか、
全員:(爆笑)
文:(笑)、法学部系の男子に六法全書でバーンと殴られたいとか。あと、改札を点検している駅員が好きで、
写真学科MTさん(以下=写):マニアック(笑)。
文:今日はボーっとしている駅員がいて、「何考えているのだろう!?」とテンションが上がりました。
全員:(爆笑)
デザイン学科TIさん(以下=デ):イマジネーションでなく、ガチな妄想なんですね。
文:それが物語につながるかもしれないと。
デ:可能性ですね。
文:はい。
演:楽しい(笑)。

Q. 日藝で見た、ふつうじゃない光景は?

美術学科SKさん(以下=美):ドン!(伏せたパネルを回転させて表示)大雪の日に女性の像がっつ!
全員:ああ~!
文:これはっ!
音楽学科KOさん(以下=音):知ってる!
美:去年の真冬にすごく雪が積もり、雪だるまを作って遊んでいる中に、美術棟の前に謎の女性の像が出来ていました。
映画学科AHさん(以下=映):うんうん。
文:本気の像ですよね。
美:話を聞いてみると僕の美術学科の後輩たちが、皆総出で前の日の夜に作ったらしく、皆が写メを撮っていて、何か誇らしかったです。
放:あれはすごかった。
演:雪だるまじゃないところがすごいです。
美:さすが日藝だなと思いました。
全員:うんうん。

REAL × QUESTION

Q. 写真学科への質問

映:年代物のカメラを持っている学生がいるけど、あの古いカメラは私物なんですか?
写:全部私物です。
全員:へ~
写:学校で何台か借りられますが、クラシックカメラは趣味で、皆、好きなものを選んで買っています。
演:年代によって写り方が違うのですか?
写:あ~。いや、使ってみないとやっぱりわからないですね(笑)。
全員:(笑)

Q. 映画学科への質問

デ:卒業までにどのレベルまで作れるようになるんですか?
映:1から10まで作れるようになります。
デ:1本撮れる?
映:はい。大体先輩方は10分から30分のものを作ることが多いですが、最後は1から10まで自分で、先生の力を借りずに作ります。
全員:へ~。
デ:すごいですね。

文:自分が一番格好良いと思う機材の持ち方は?
全員:(笑)
文:これやってるとき自分格好良いな、みたいな(笑)。
映:先生に教えていただいたのですが、パン棒を持つときこういう風(順手)に持たないで、こういう風(逆手)に持つんですよ。その持ち方をしているときの自分は「やったなあ」と。
全員:(笑)
文:自分、格好良いなと(笑)。
映:こっちで(逆手)で持ってる私! みたいな(笑)。
演:なるほど~。

Q. 美術学科への質問

放:ヌードのデッサンの授業があるって本当?
美:本当です。
放:うらやましいです!
全員:(笑)
美:でも、そんなヘンな気持ちとかももうなくて、もう物としてしか見られない眼になってしまってるので。
全員:へぇ~。
放:女性も、男性もですか?
美:はい、どっちもです。ポーズも止まってるのもあれば、ずっと動いているのもあって、どっちもです。

Q. 音楽学科への質問

文:一番うれしい設備は?
音:それはやっぱり練習室。
全員:あ~(納得)。
音:練習しないとやっぱり上手くならないし。広い部屋は広い、狭い部屋は狭い…いろんな部屋があるのでいろんな練習ができます。
文:うん、うん。

演:なんの授業が一番好き?
音:やっぱりレッスン。声楽の授業──ソルフェージュとかオペラとか、実技の授業が好き。やりがいがあります。

写真学科3年生 M.T.さん
人を撮ることを仕事にしたい、大切にされる写真が撮りたいと話したM.T.さん。彼女が誠実に人と向き合っていることは、彼女が切り取った東ティモールの子どもたちの様々な表情からも伝わってきます。

映画学科 撮影・録音コース2年生 A.H.さん
国内だけでなく海外にも出てドキュメンタリーを作りたい、と将来への意気込みを語ったA.H.さん。歌舞伎サークルに入っています、というコメントがさらりと出てくる幅の広さは日藝生ならでは!

美術学科 版画コース3年生 S.K.さん
将来は絵を通して子どもと関わっていきたい、と話していたS.K.さん。普段の柔らかな語り口からは想像できないキャラを見せたインタビューでの「受験生へのメッセージ」は必見!

音楽学科 声楽コース4年生 K.O.さん
子どもからお年寄りまでいろんな人と出会えるのが合唱の魅力、と話すK.O.さん。将来は合唱の指導や指揮をしたいそう。インタビューで披露してくれたバリトンの歌声は取材陣も思わず聞き惚れてしまったほど。

今年で4年目を迎えるREAL! NICHIGEI。2012年度版からはスマートフォン・タブレット端末での閲覧にも対応しました。
各学科の魅力や外せない授業など、在学生にとっても日藝を再発見出来るREALな情報が満載! 気になる続きはこちらから!

➜ http://real.art.nihon-u.ac.jp/2012/

14:00 REAL×QUESTION

他学科から寄せられる質問に学科代表者が返答する企画です。日頃感じていた「○○学科のここが知りたい!」を解決、今まで知らなかった学科の側面が見えてきます!

15:45 撮影を終えて

今日一日を振り返り、自由にディスカッションしてもらいました。始めの緊張した様子が嘘のように打ち解けた8名。このノリの良さは日藝ならでは!

16:30 一言コメント

それぞれから頂いた一言コメントはWebで! 長丁場の収録にも関わらず、終始スタッフに対する気遣いを忘れない姿勢に、制作に携わる日藝生ならではの"プロフェッショナル"を見ました。皆様お疲れさまでした!

Q.文芸学科への質問

音:他学科の人間を巻き込んで作ってみたい作品とかやってみたいことは?
文:そうですね〜演劇とかと舞台とかやったり…自分が原作になりたいですね。自分が書いた小説が演劇や映画の原作になったらうれしいかも。
映・演:あ〜うん、うん。
文:やりましょう!(笑)
演:お願いします!(笑)

放:日藝の文芸学科を選んだ理由は?
文:文学を「研究」ではなく、「創りたい」って思った時に、設備も整ってるし、教授の先生方も実際の作家の先生が教えてくれるので、「いいな、文に関わることなんでも出来るな!」って思ったんです。あと私は、文章に関わること、本に纏わることがなんでも好きだったので、そういうことをなんでも出来るところに来たかったっていうのがあります。

Q.演劇学科への質問

写:裏方の仕事は男の人ばっかり?
演:外部に出ると男の人多いですけど、私のコース、学校は女子ばかり。上も下も。でもやる気は男女関係ない! 負けません!!

音:演技はどうやったら上達するの? 自分は今音楽でオペラをやってるんですけど、演技が苦手で、どうやったら上達するのか? どういう練習があるのか、教えてください。
演:私はスタッフのコースなので、友人とかから聞いたことや見た話ですが、「人に伝える気持ち」が大事なのかな? と思います。人間観察とかもすごいと思います。(演技コースの人は)キャラが憑依しているというか、すごい(笑)

Q.放送学科への質問

音:日藝でしか学べない自慢の授業は?
放:僕の場合は「テレビ制作」! スタジオってのが普通は学校にはないと思うので、ロケで番組作るのは比較的どこでも出来ると思うんですが、スタジオで照明組んで、編集して…っていうのはここでしかできないと思ってます。
全員:あぁ〜。

美:実技と座学の割合は?
放:そうですね〜専攻にもよるんですけど、僕の場合は、週に一回テレビ制作という授業があるので、その日は丸一日企画から、ロケ、撮影、スタジオ、編集…という感じで。あとCMだとコピーコンテを考えたりとかの座学があります。

Q.デザイン学科への質問

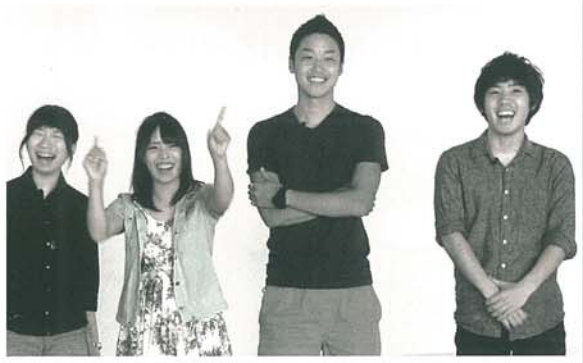
美:ついついデザイン的な眼で見ちゃう、生活にあるモノは? 建物以外で!
デ:建物以外? 建物になっちゃうかもしれないけれど、建物の中の、椅子のスケールっていうか、背もたれがどこまであるかとか、使いやすい寸法・デザインがあると思うので、そのあたりは常に見ちゃいます。

写:模型とか作るの? 作った後はどうするの?
演:うん、一緒。かさばると思うんだけど、作ったあとは?
デ:人によると思うんですが、僕は全部取ってますね。捨てちゃう人もいるみたいだけど。

撮影を終えて

音:いや〜、どうでしたか?
全員:(笑)
放:無茶ぶりだね。
文:今日はいろいろな学科に会えて良かったです。本当にみんなかわい子ちゃんばかりで。
音:本当にありがとうございます。
美:いや〜本当にありがとう。
全員:(笑)
文:初めて会ったのに、この感じはすごい。ノリがいい!
音:初めて会った気がしない。
放:学年も違うしね。
文:前々から友だちだったような。
演:わ〜、いいことだ!
全員:(笑)
デ:全員が全員、自分の好きなものに向かって熱心に取り組んでいるので、絶対話は尽きないですよね。
全員:うんうん。
文:今度飲みに行きたいですね。
全員:(笑)

文:どうですか、日藝?
放:日藝の魅力は、8学科の違うジャンルの人が関わって学生生活を送れるのが、すごく魅力的ですよね。
全員:うんうん。
文:出会いがあり良いですよね、本当に。
演:3年もいるのに知らないことばかりで、仲良くしてくださいと思いました。
デ:ここで終わりたくないな、って感じがすごくあります。
全員:うんうん。
デ:すぐでなくても、10年後でも一緒に何かを作りたいというモチベーションが上がる機会だったので、そういう場に出会えたのは良かったです。
音:素晴らしい。
演:良い企画だ!
全員:(笑)
文:本当にありがたいですよね。
美:来年も出ようかな…
全員:(笑)

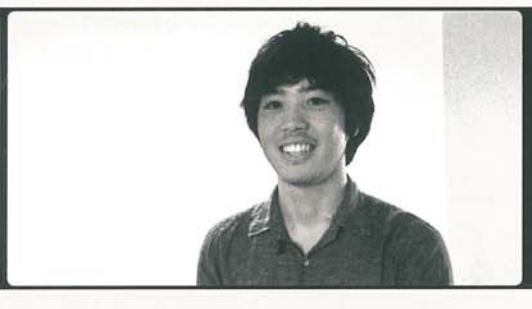


文芸学科3年生 M.N.さん
ジャンル分けのできない人間になりたい、と自身の将来像を語ったM.N.さん。ゼミ誌の企画として「日藝生のノリの良さ調査」を敢行したというエピソードから既にその片鱗を見ることができます。

演劇学科 装置コース3年生 N.T.さん
自分の作ったセットの上で人が動くことで誰かに何かを伝えられたら、と語ったN.T.さん。インタビューでは対談時のイメージとは真逆をゆく、「つなぎに雪駄」という凛々しい姿も様になっていて素敵でした!

放送学科 テレビ制作専攻4年生 T.K.さん
世界に誇れる映画を自分の手で生み出したい、と将来への決意を語ったT.K.さんは元高校球児。野球に夢中の高校生活から一転、テレビ制作を専攻するに至った経緯についてはインタビューにてチェック!

デザイン学科建築デザインコース3年生 T.I.さん
作り手としての責任意識を持った仕事をする建築家になりたい、と将来像を語ったT.I.さん。「間取りのコピー&ペーストをせずとも集合住宅が作れる、と手応えを感じた」という彼の作品も要チェックです!



SEISHUNの君たちへ

遊ぼうぜっ!!

杉山陽洋
○演劇学科 平成17年度卒

現在公演の真っ最中。自分で言うのも何だがなかなかハードな仕事をしていると思う。学生の頃からは想像もできない。

演劇学科を卒業、今は“世田谷パブリックシアター”という現代演劇と舞踊を主に上演する劇場で、技術スタッフとして働いている。自身で作品をつくることもあれば、作品をつくることをサポートする側にもまわる。どんなことでもやるし、誰とでもやる。無名の新人だろうと芸能人だろうと海外のアーティストだろうと。好きな人だろうと嫌いな人だろうと。徹夜もする。いくらでもやる。毎日が新鮮で常に創造に満ち溢れたクリエイティブでエキサイティングな環境。

だからその分仕事もハードなものになる。その中でいつも心がけていることがある。

“遊びまくる”

考えてみればそれは学生時代からなんら変わっていない。仲間と寝る間も惜しんで芸祭の出しもの練習をしたり、徹夜で芝居の稽古をしたり、もちろん普通に飲みに行って夜通し語り合ったり、次の日に二日酔いで寝坊したりと学生時代は散々遊んだ。授業だろうと、勉強だろうと、外部活動だろうと関係ない。そこで一緒にいる人、一緒につくるひと、みんな一緒になって遊ぶ。あーでもない、こーでもないって言いながら、コミュニケーションしながら遊ぶ。全力で楽しみ遊ぶ。

今ではむしろ仕事をしているのか遊んでいるのか分からない現場もある(笑)。

遊ぶってのもなかなか難しい。でもやっぱり遊んだもん勝ちだと思う。

何かを創る作業は楽しい。行き詰まったり、うまく進まなかったり、過酷な練習をしたりと厳しい現実ももちろんある。けど、それを超えた先にとてつもなく面白いものに出会える瞬間がある。そんな瞬間を学生時代共に過ごした仲間と、最近一緒に仕事する機会が増えて来ている。これほど楽しい遊びはない。

これを読んでいる皆さんともいずれどこかで遊ぶかもしれない。そのときは全力で遊びましょう。だから今を仲間たちと真摯に全力で遊んでください。遊びなれてください。学生生活に。やりたいことに。将来に。

よっし! おしまい。さぁて遊びに行こっと!!

勤続十二年目の芸術祭

山下聖美 ○文芸学科 准教授

今年の芸術祭は、私にとって、とても印象深いものとなりました。勤続十二年目、こんなにどっぷりと「芸祭」を体験したことはありません。

そもそも、私は学園祭というものとは、縁遠い学生時代を過ごしていました。学祭期間は、私にとってはただの連休。授業もないのにわざわざ大学に来ることなど「意味がわからない」と思っていましたし、男女仲良く出店を出す姿に憎悪すら感じていたものです…本当にひねくれた大学生でした。

日芸に勤務し始めた頃も、「せっかくの休みなのに勤務か」などと思いながら、学科事務室に閉じこもり、居眠りなどしていたものです。めずらしく、芸術祭期間中に雨が降ったことがありました。そのときは、「ああ、今日は早く帰れる」と密かに喜んだものです…本当に怠惰な助手でした。(笑)

しかし、年も経て、勤続十二年目の今年、なぜか芸術祭にどっぷりとつかるという、思ってもみない三日間を過ごすことになりました。それもこれも、ゼミや実習授業の学生たち、そして学科の実行委員の学生たちの熱意を目の当たりにしたからだと思います。

彼らたちが準備にいそしむ姿を日々見ていた私は、「芸祭」の日が近づくにつれ、なぜだか一緒にわくわくと心が動くのを感じました。もしかしたら大学生というものは、こういう気持ちで学園祭を迎えていたのか、としみじみと思い、まるで失われた学生時代のときめきを取り戻しているかのようでした。

さらに、彼らのステージ本番の前日、なぜか私が、どきどきとして眠れなくなるという事態が発生したのです。なにもしない私が、です。そしていよいよやってきた当日。胃が痛くなるまで準備をしていた学生たちの、本番での堂々としたステージを見ながら、胸に熱いものがこみ上げてきました。大げさではなく、学生たちは輝いていました。と、気持ちはまるでステージママ。もしかしたら学生よりも私の方が、興奮状態であったのかもしれません。

それにしても、改めて見渡せば、「芸祭」において、先生方や卒業生の方たちが、いかに暖かい視線をそそいでいることか。拍手や歓声、ときに変装、さらにはただただ来てくださるというだけで、「芸祭」という場を盛り上げていく。そもそも、あんなにも多くの卒業生が、後輩たちや私たちを訪ねて来てくれるということが、他の大学ではあまり見られない現象なのかもしれません。

校舎が新しくなり、世の中が変わっても、久しぶりに行ってみたいな、と思う「芸祭」という空間があり続けること。なんと素敵なことなのでしょうか。この空間に来ると、学生時代に体験したときめき感を思い出すこともできるだろうし、私のように、この年にして初めての、ときどき感を体験することもできるのです。

しかし、年甲斐もなくどきどきとした分、芸術祭終了後の疲労が、半端なく強烈に私を襲っています。「芸祭」の醍醐味を、心身共に味わうことができた、と感じています。

三気の機を逃さず

秋元貴美子 ○写真学科 准教授

みなさん、あそんでますか?

この場合の「あそび」はいわゆる通俗的な遊びのことを言っていません。いや、もちろん、そういったことも経験値を上げるには必要なのですが。言いたいのは、自分の専門だけでなく様々なことに興味を持ってあたり、心から楽しんでいるかな?ってことです。

大学時代は長いようで短いです。しかし、この間に得たものは生涯の宝になります。だから「何」をするか、学ぶかがとても重要です。先ずやってみて、その結果が目的と違っていたとしてもご愛敬、その道のりも大事です。若いときに無駄なことなど何もありません。だから何をするにも心にあそび(ゆとり)をもって挑戦して欲しいと思います。

そして、挑戦に必要なのが三つの気です。まず「やる気」。これが無くては何も始まりません。はじめの一歩は勇気がいります。しかしその一歩が自分を未来へ運んでくれるのです。次に「元気」が無ければ何事も続けられません。身体と精神は表裏一体、どちらも充実してこそ、畢竟、元気であれば歩き続けられるのです。最後に「根気」が無ければ何事も成し遂げられません。飽きずに粘り強く挑戦することで未だ見ぬ景色を眼にすることができるのです。この三気があれば何でもできるはず…なんですが…。ここでもう一つ大事な要素、「機」があります。三気を、機を逃さず投入できるでしょうか。実はこれが一番難しいことかもしれません。

禅で「啐啄の機」という言葉があります。「啐」は、鳥の雛が卵から生まれ出ようとする時に殻の内側からコツコツと音をたてることをいい、「啄」はその時にすかさず親鳥が外側から殻をつついて破ることをいいます。つまり、タイミングが合わないと雛はこの世に生を受けることができないのです。これはよく師弟関係や親子関係で使われますが、転じて一個の個人、自分自身にもいえるのではないでしょうか。

三気をいつ自分に与えるか、その好機を違えないこと。その為には、自らを客観視するもう一人の自分が必要です。一歩ひいて全体を見る、そして冷静さを持って省みることで、機を読むことができるのです。

自分を生かし活かすのは、自分自身でしかありません。自らが欲する「未来」の自分のために、三気の機を逃さないよう、天を仰いで深呼吸してみて下さい。

「矢と歌」

戸田浩司 ○図書館事務課長

SEISHUNの君たちへ、米国詩人H・Wロングフェローの「矢と歌」という詩を贈りたい。

私は空に向かって矢を放った
飛び去る矢は早過ぎてその行方を追えず
矢は私の知らない場所に落ちた

私は空に向かって歌を歌った
飛び去る歌を追いかけられるほどの
鋭く強力な目を誰も持ち合わせておらず
歌は私の知らないところに落ちた

あまたの年月が過ぎ去ったあとで
私は一本の樫の木にあの矢が折れずにささっているのを見つけた
そしてあの歌が少しも変わらず
友の心に宿っていたのを私は知った

人を励ましそうと矢を放ってもそれが狙ったところに届いたのか、あるいはそうでなかったのかさえ分からなくなる。人を慰めようと歌を歌っても誰の心にも届かず消え薄れたように思える。期待したような反応が得られず、また思ったとおりの結果が出ず意気消沈する。ところが時間が経ち、やがて自分でも忘れてしまったころ、実はそれらがちゃんと存在していることがわかる。自らが望んだとおりではないかもしれないけれど、どこかで、そして誰かの心の中でしっかりと残っている。その矢は憂鬱だった人の心を励まし、その歌は絶望の中にあった人に希望を与える。

自分の未来が分かっている人など誰もいない。結果はどうなろうと、今自分が持てるだけの矢を放ち、歌えるだけの歌を歌おう。いつの日か誰かの心に矢と歌が宿っていることを信じて。

「Zushi Media Art Festival 2012」との同時開催で「日藝アーティストmeet 逗子」展を実施!

日本大学芸術学部では、今秋神奈川県逗子市で開催された「Zushi Media Art Festival 2012（以下、ZMAF2012）」とのコラボレーションとして、本学部在校生と卒業生が同フェスティバルにて作品を発表、ワークショップを実施するとともに、本学部江古田キャンパスにて、関連企画となる「日藝アーティストmeet 逗子」展を同時開催いたしました。

ZMAF2012は、2012年9月16日～10月14日まで逗子市内で開催されたメディア・アートの祭典で、逗子市内の様々な場所で、多彩な映像作品やインスタレーション作品が公開されました。このフェスティバルは、地域の人々、クリエイター、学生達が一緒になって、豊かな自然と歴史から育まれた逗子の街に、地域に根ざしながら先端芸術を配信していく文化的拠点を展開していくというものです。

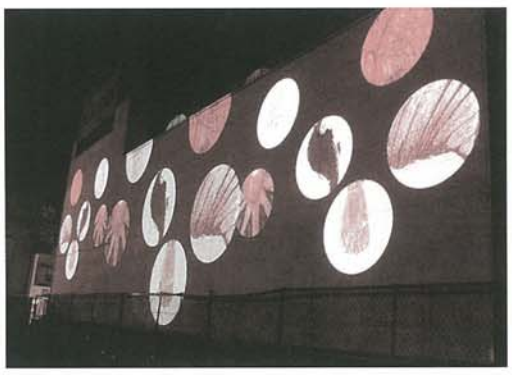
本学部では、ZMAF2012に協力参加し、デザイン学科、映画学科、音楽学科、写真学科の在校生や卒業生有志が、逗子の自然、歴史、文化、人々の生活を取り込みながら、作品やワークショップを通して、多様な逗子の街の文化的側面を投影しました。また、10月7日～20日、江古田校舎で開催された「日藝アーティストmeet 逗子」展では、逗子で発表された作品が、3つのテーマ別に3期に渡り紹介されました。

デザイン学科准教授　向井知子

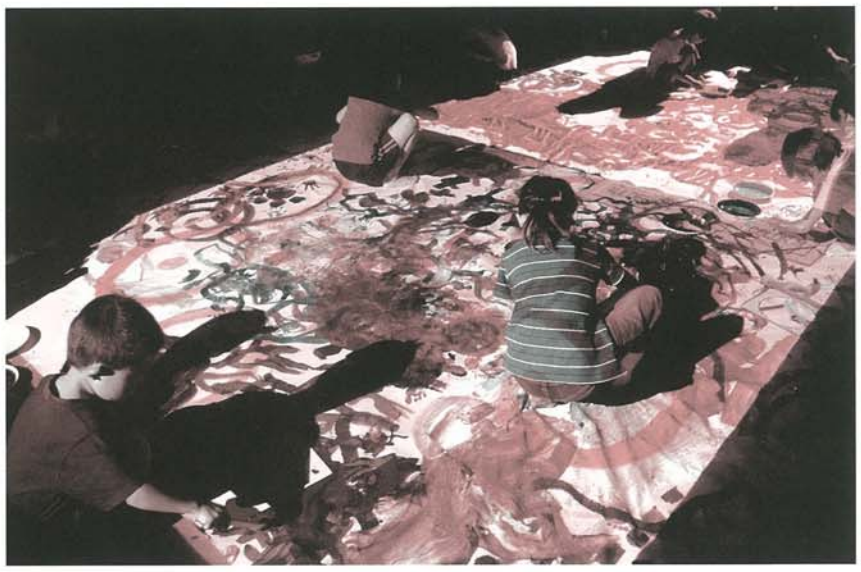
■ Zushi Media Art Festival 2012
2012年9月16日～10月14日
会場：逗子市内（逗子小学校、逗子文化プラザ市民交流センター、保育園ごかんたいそう、キリガヤ跡地他）
主催：逗子メディアアートフェスティバル実行委員会
企画・制作：プロジェクションマッピング協会

■ 日藝アーティスト meet 逗子
会場：日本大学芸術学部江古田校舎　ギャラリー棟A&Dギャラリー、北棟ステージ
主催：日本大学芸術学部
監修：向井知子（デザイン学科准教授）
企画協力：石多未知行（逗子メディアアートフェスティバル総合プロデューサー）
協力：逗子メディアアートフェスティバル実行委員会、プロジェクションマッピング協会
逗子小学校、保育園ごかんたいそう、日産プリンス神奈川販売店逗子店
株式会社キリガタ、逗子文化プラザ市民交流センター

▼ワークショップ＆映像投影『森めがね』
諏訪まり沙（デザイン学科3年）



▼ワークショップ＆映像投影『Zushi aquarium』
中島亜唯、浜中 峻、京野朗子、織田有紀（デザイン学科卒業生）



▲「日藝アーティスト meet 逗子」展

▲ 映像＆ペインティングワークショップ『.line.［ドットラインドット］』和久井 遥（大学院造形芸術専攻2年）

◀ 映像インスタレーション『FOOT and feet』大野絢子（映画学科2年）曽根貴了（音楽学科1年）

地域社会とアート

―― 地域社会と音楽による交流 ――

2011年3月11日の東日本大震災以降、地域社会の連携や支援が「人との絆」を生む原動力として叫ばれるようになりました。音楽学科では、毎週水曜日に練馬区内の障害を抱えるお子さんが、音楽療法を受けるために学内に設置された音楽療法セッションルームへ通ってきています。そこでは音楽療法士を目指す学生が、音楽療法実習としてセッションに参加し音楽療法を学んでいます。セッションルームには隣接する観察室もあり、お子さんの在籍している特別支援学校の先生方も音楽療法を見学されるなど、障害を抱えるお子さんの発達支援と地域社会との連携を図っています。毎週木曜日には、豊島区社会事業団の特別養護老人ホーム「風かおる里」、中野区の東京総合福祉センター「江古田の森」でも音楽療法実習を行っています。施設の職員さんの理解と協力を得ながら、利用者さんと音楽の時間を共有しています。

音楽学科では演奏を通した地域交流も行っています。有志による保育園でのコンサートをはじめ、所沢市の中富小学校区家庭教育学級で行われた、第4回家庭教育学級講座「生の音に親しむ」では、クラシックの名曲や映画音楽を、弦・管打楽コースの学生が演奏しました。また千川通りで行われた秋の全国交通安全運動「練馬交通安全祈願パレード」に参加しました。アートが地域社会と連動して、〈今〉をよりよく生きていくことは、学生にとってもQOL（生活の質）を高める大きな意義を持っています。

音楽学科教授　土野研治

写真学科

◉湿板写真技法による幕末写真の再撮影プロジェクト実施

8月30日〜9月2日

原 直久教授を代表とする、高橋則英教授、田中里実専任講師、志賀裕一助手、大学院生鳥海早喜さんを加えた研究チームが長崎において、幕末に活躍した英国人写真家フェリーチェ・ベアト（1834–1909）が撮影した長崎市内の「眼鏡橋」で、当時の写真技法「湿板写真法」で再現撮影を実施し実験は成功。長崎では大きな話題となり地元テレビ局や新聞社が多く取材に訪れ記事として取り上げられました、当日にはNHKローカルニュースでも放送されました。

◉APIS2012 TOKYO開催

9月8日・9日　江古田校舎

高橋則英教授が実行委員長となり、写真のオルタナティブ・プロセスをテーマとした国際シンポジウム（APIS）が開催されました。

◉卒業生によるオリジナルプリント展「フォトグラフィティー2」開催

10月23日〜11月9日　江古田校舎

この展覧会は優れた制作活動を行っている昭和55年以降に卒業した中堅から若い世代までの写真学科卒業生と大学院映像芸術専攻（写真分野）修了者による作品展示。芸術祭の期間と重なった為、多くの観覧者を得ました。

◉坂田栄一郎写真展開催

10月30日〜11月10日　江古田校舎　東棟写真ギャラリー

朝日新聞社週刊誌「AERA」の表紙ポートレートを撮影し続けている坂田栄一郎氏（写1964卒）の「amaranth」写真集からの作品展示を開催いたしました。

◉平成24年度芸術祭作品展示 写真学科奨励賞・新写真派協会賞受賞者

○写真学科主任賞　加藤雄也　「ともだち造り」
○写真学科奨励賞
小暮和音　「Flash」・高洲夢平　「Retratos」
○新写真派協会賞　長谷川睦美　「命の音」

◉平成24年度日本大学芸術学部写真学科卒業制作展

本年度は3会場にて開催いたします。ぜひお越しください。

○江古田校舎芸術資料館　全体展
平成25年2月15日〜3月2日
○ポートレートギャラリー　選抜展
平成25年3月7日〜3月13日
○新宿ニコンサロンbis　選抜展　平成25年3月9日〜11日

映画学科

◉各種映画祭・コンテスト等受賞のお知らせ

○下北沢映画祭　グランプリ
『悲しき子供』（卒業制作）　監督：堀越勇輝
○映像文化制作者連盟 映文連アワード2012　パーソナル・コミュニケーション部門　技術奨励賞　『広がる光』（卒業制作）　村田圭佑（平成24卒）
○うえだ城下町映画祭自主制作映画コンテスト　大賞
『小野寺たまこの初恋』（卒業制作）　監督：杉目七瀬
○水戸短編映画祭　コンペティション ノミネート
『他人家族』（卒業制作）　監督：巻田勇輔
○ナレッジキャピタル　学生映像アワード BACA-JA2012
優秀賞　『愛のディナー具材』　千葉佐記子（平成24卒）

◉学生映画祭「新・女性映画祭 "こんなふうに私も生きたい"」開催

12月15日〜21日　オーディトリウム渋谷

映画学科理論評論コース3年生が昨年度に引き続き、授業の一環として学外で映画祭を実施します。今年は「新・女性映画祭 "こんなふうに私も生きたい"」と題し、企画からチラシ作り、交渉、広報、運営まですべて学生の手によるもので、多くのプログラムを予定しています。

美術学科

◉各種展覧会のお知らせ

○都美セレクション展グループ展公募第1回
「版17特別展―越境する版画表現」
12月5日〜11日　東京都美術館　ギャラリーC
笹井祐子准教授（版画作品）
○第37回全国大学版画展
12月1日〜16日　月曜休館　町田市立国際版画美術館
石合広子（院）　酒井みのり（院）　池淵梨香（院）　田邊由貴（院）
○日芸版画修了卒業展
会期：平成25年2月4日〜9日　ギャラリー川船
○日本大学芸術学部美術学科 卒業制作展
平成25年1月8日〜22日
○日本大学大学院芸術学研究科 造形芸術専攻修了制作展
平成25年1月24日〜2月2日
○平成24年度第36回東京五美術大学連合卒業・修了制作展
女子美術大学、武蔵野美術大学、東京造形大学、日本大学藝術学部、多摩美術大学彫刻系・絵画系卒業生・修了生による合同展覧会
平成25年2月21日〜3月3日　国立新美術館
○第64回十日町雪祭り　「雪の芸術部門」
美術学科彫刻コース有志参加
平成25年2月15日〜17日
○gallery元町 15th Anniversary展
平成25年1月1日〜13日　内山翔二郎助手
○YEARS END EXHIBITION OF MINI SCULPTURES
12月5日〜22日　ギャラリーせいほう　鞍掛純一教授

音楽学科

◉演奏会のお知らせ

○第108回定期演奏会
10月22日　練馬文化センター・大ホール
管弦楽　日本大学芸術学部管弦楽団
○第48回室内楽の夕べ
11月7日　練馬文化センター・小ホール
○第40回ファカルティコンサート 本学教員による演奏会
11月10日　江古田校舎・音楽小ホール
○第24回ウインドオーケストラ定期演奏会
11月20日　練馬文化センター・大ホール
演奏　日本大学芸術学部ウインドオーケストラ
○第41回ピアノコンサート
11月26日　練馬文化センター・小ホール
○第109回定期演奏会
12月5日　練馬文化センター・大ホール
管弦楽　日本大学芸術学部管弦楽団
合唱　日本大学芸術学部合唱団
○平成24年度　大学院修了演奏審査会［ピアノ］
12月15日　江古田校舎・音楽小ホール
○平成24年度　大学院修了演奏審査会［管楽・声楽］
12月18日　江古田校舎・音楽小ホール
○第33回新作室内楽の会
12月21日　江古田校舎・音楽小ホール
○平成24年度　大学院修士論文要旨発表会・修了演奏会
3月14日　練馬文化センター・小ホール
○平成24年度　卒業演奏会
3月21日　練馬文化センター・小ホール

文芸学科

◉稲葉真弓先生『半島へ』（講談社刊）が第7回親鸞賞を受賞!

授賞式は平成24年12月8日に京都市内で開催予定。

◉「第23回伊藤園お〜いお茶新俳句大賞」に入賞!

（応募総数：173万7,618句）

○都道府県賞

輪切りして等高線のキャベツかな	二川智南美（3年）

○佳作特別賞

ピーマンはついに苦手なまま二十歳	小沼 理（3年）
寒椿私にも火を分けてくれ	笠原早有実（4年）
落丁の明らかとなる雪催い	北野太一（4年）
手土産の雑多な蜜柑ふたつ食ふ	池田真那美（卒業生）

○佳作

踏みしめて落葉の鳴く音ドラムの音	宮﨑 綾（3年）
春めきて眼鏡は要らぬ並木道	川本桃子（3年）
春暁の夜汽車の頁にときめいて	加藤 澪（3年）
悴んだ手で空っぽの籠手落とす	飯島哲也（卒業生）

また、日本大学芸術学部が「優秀学校賞」を受賞しました。

◉村上絵梨香さん（3年）が、『文芸思潮』第47号 第8回エッセイ賞優秀賞受賞!

受賞作「関心は半病床の中」は『文芸思潮』第47号に掲載。

◉第28回日大文芸賞発表!

優秀賞入賞作は、『日本大学新聞』（7月20日発行分）に掲載。

○文芸賞　「穴」　杉山知紗（3年）
○優秀賞　「ワンモアプレイ」　儀保佑輔（博士前2年）
○佳作　「ランドスケープ」　額賀 澪（4年）
「クレーヴの花」　沢田石円（3年）
「怒れる夏」　関野圭吾（2年）

◉山内貴寿さん（4年）が4gamer.net賞を受賞!

HTML5ゲームコンテスト forスマートフォン「4gamer.net」賞の受賞作「divid」はHTML5ゲームコンテスト forスマートフォンからダウンロードできます。

◉第11回江古田文学賞決定!

（応募総数：60篇　予選通過6篇）
「ポテト」大西由益（3年）『江古田文学』81号に掲載。

◉永沼絵莉子さん（2年）が第35回吉野せい賞奨励賞を受賞!

受賞作「金魚すくい」　（応募総数：41篇）

草野心平記念文学館において、表彰式と記念講演会が10月4日に行われました。

演劇学科

演劇学科では、今年度も多くの演劇・日舞・洋舞の発表を行ってまいりました。

2012年も残りわずかとなりましたが、まだまだ舞台総合実習（2年生）・卒業制作の発表を控え、日々稽古は続いております。一年の締めくくりに、演劇という芸術鑑賞はいかがでしょうか？　ぜひ、日頃の成果を、また4年間の集大成をご覧ください。公演日程は下記の通りです。

◉舞台総合実習（2年生）

会場：所沢校舎アートセンター・ブラックボックス
○【日舞】「だいきらい（100万回生きたねこより）」
創舞指導：藤間恵都子　12月1日
○【演劇】「七本の色鉛筆」
作：矢代静一　演出：西沢栄治　12月13日〜15日

◉卒業制作

会場：江古田校舎北棟中ホール
○【演劇】「ブルーストッキングの女たち」
作：宮本 研　演出：粂野由里絵　12月7日〜9日
○【洋舞】「Modern Dance Performance」
創舞指導：加藤みや子　12月14日・15日
○【日舞】「コントラスト」
創舞指導：花柳昌太朗　12月21日・22日

※観劇にはご予約が必要です。詳しくは学科ホームページをご覧ください。http://theatre.art.nihon-u.ac.jp/

放送学科

◉中学生のための情報番組制作ワークショップ

練馬区教育委員会主催、放送学科共催の情報教育推進事業として、6月23日から8月3日まで、鈴木康弘教授指導のもと「中学生のための情報番組制作ワークショップ」が江古田校舎にて開催されました。「伝えたい、練馬区のこんな『人』、あんな『人』。」をテーマに、中学生自らが企画から取材、編集、そして本番のスタジオ収録にまでチャレンジし、テレビ情報番組「People change people's mind」を制作。最終日には、「テレビメディアについて考える」と題した講演会が行われ、中学生たちは番組制作の実践をとおして学んだことを発表し合い、テレビの影響力や情報リテラシーを身につけることの大切さなどを熱心に語り合いました。

◉「ギャラクシー賞受賞『報道活動』を見て、制作者と語る会」を後援

11月10日、江古田キャンパスで第5回「ギャラクシー賞受賞『報道活動』を見て、制作者と語る会」が開催されました。これは第49回ギャラクシー賞の報道活動部門で大賞を受賞した「絆いわて『ふるさとは負けない！』キャンペーン」（IBC岩手放送）をはじめ、優秀賞「市営散弾銃射撃場鉛汚染問題における一連の報道」（伊万里ケーブルテレビジョン）、優秀賞「オムニバス・ドキュメンタリー『3.11大震災記者たちの眼差し』I〜IV」（TBSテレビ）など、その報道活動が高く評価された制作者を迎え、選奨委員、ジャーナリズムに関心を持つ研究者や視聴者、学生が一堂に会したシンポジウム。今回は災害と報道、地域の環境汚染、復興への道のりをどう報道するかといったテーマで活発な議論が行われました。

◉授業から芸祭までのコラボ企画を総合プロデュース

放送学科の兼高聖雄ゼミが、本学とテレ朝動画、秋葉原ディアステージとのユニークな共同企画をプロデュースしました。

芸術教養課程「社会現象の解読」の特別講師にでんぱ組.inc を迎えた授業を皮切りに、写真学科でのでんぱ組.inc 撮影大会、さらには11月3日に江古田校舎中ホールで催された芸術学部祭企画「でんぱ組.inc vs 日芸の神神」までの三本立てコラボ企画で、その模様はテレ朝動画「でんぱの神神」（#22・#23）で有料配信されています。また、放送学科有志の撮影編集による「特別編」は、YouTubeでご覧になれます。

デザイン学科

◉「エステーデザインアワード2012」に入選

（主催：エステー株式会社、応募総数：542点）
○入選　『アロマブル』　高橋夏美（3年）
「わたしのアロマ」から考えられる新たな芳香剤のデザインアイデア。6月30日に一次審査通過作品19点の作品展示会と入賞者の発表、ならびに授賞式が行われました。

◉「第16回きものデザインコンクール」に入選

（主催：京都工芸染匠協同組合）
○一般手描き部門　平野志奈（2年）
受賞作品は10月26日から28日まで、京都府庁旧本館2階正庁に展示されました。その後、長浜・小千谷・仙台を巡回展示し、平成25年1月17日〜18日に東京有楽町ジャパンシルクセンターで東京展を開催。また3月12日〜16日までフランス・パリ発表会を開催予定。

◉「第7回金の卵オールスターデザインショーケース」に出品

展覧会選考展示（8月30日〜9月9日　AXISギャラリー）
『森めがね』　諏訪まり沙（3年）
『L.O.L（Laughs Outlet Loud）』　前田紗希（3年）
『Homes in Woods』　松岡ともこ（3年）

◉「日藝アーティスト meet 逗子」を開催

Zushi Media Art Festival 2012（以下ZMAF2012）と本学部との共同企画展が10月7日〜20日まで江古田校舎で開催され、多くの方々にご来観いただきました。詳細は本誌7ページ上段をご覧ください。

◉青木祥子さん（3年）がラベルをデザインした「やまひろ広沢園」さやま茶のペットボトルが商品化

「やまひろ広沢園」では、今までにも狭山市出身の著名なデザイナー、ツモリチサト氏のラベルデザインをペットボトルに起用するなどしてきました。このたび同商品のラベルリニューアルにあたり、以前青木さんが手掛けたグラフィックデザインが関係者の目に留まり大抜擢となりました。（発売場所：狭山市役所・ファミリーマート狭山市内各店・ファミリーマート三井アウトレットパーク入間店ほか狭山市内にて）

◉「コミュニケーションデザイン展（CD展）――ぎゅっと展」開催

コミュニケーションデザインを学ぶ2、3年生の授業を通じた活動成果の発表展覧会です。

11月27日〜12月17日　江古田校舎ギャラリー棟、芸術資料館、西棟2階ショーケース ほか

※ただし、芸術資料館のみ12月20日まで開催
http://www3.art.nihon-u.ac.jp/design/2012/gyutto/
twitter: @gyuttoten2012

◉「2012年度日本大学芸術学部デザイン学科卒業制作選抜展・大学院造形芸術選考修了展」開催

学部・大学院それぞれで取り組んだ研究の集大成として制作された作品が多数展示されますのでご期待ください。

平成25年2月16日〜3月3日　江古田校舎大ホール棟、ギャラリー棟、西棟デザイン学科アトリエ

※紙面の都合上、各イベント会場の休館日等は省略させていただきました。ご了承下さい。

College Administration Office

【事務局からのお知らせ】

◉平成24年度授業日程

付属高等学校推薦入試・編入・転部試験	12月11日（火）（休講）
後期前半授業終了	12月14日（金）
卒業試験、後期補講期間	12月15日（土）〜21日（金）

※補講の実施を必要としない科目については、休講とする。

冬期休暇	12月22日（土）〜平成25年1月5日（土）
後期後半授業開始	平成25年1月7日（月）
卒論・卒制提出手続	1月10日（木）11日（金）
学年末A試験（含、後期試験及び卒業追・再試験）	1月22日（火）〜28日（月）（授業内試験）

※試験を実施しない科目、B試験該当科目は平常通り授業を行う。

学年末B試験（含、後期試験及び卒業追・再試験）	1月29日（火）〜2月4日（月）

※所定の試験時間割にて試験を実施し、平常授業は行わない。

学年末休暇	2月5日（火）〜
平成24年度卒業式	3月25日（月）〈全日大〉於：日本武道館
芸術学部学位記授与式	3月25日（月）午後 於：江古田校舎

◉芸術資料館企画展開催日程

コミュニケーションデザイン展	11月27日（火）〜12月20日（木）

（12月11日（火）は付属推薦・編入・転部試験のため休館）

美術学科卒業制作展	平成25年1月8日（火）〜22日（火）
大学院芸術学研究科造形芸術専攻修了制作展	1月24日（木）〜2月2日（土）
写真学科2013卒業制作展	2月15日（金）〜3月2日（土）

◉平成25年度一般入学試験日程

※期日はすべて平成25年、試験場は江古田校舎とする

【第1期】（募集人員376名）

学科（募集人員）	出願期間 郵送	出願期間 窓口受付	試験日	合格発表
写真（43）	1月8日〜29日（郵送必着）	1月28日・29日※1 1月29日・30日※2	2月5日・6日	2月14日
美術（30）			2月5日・6日	
音楽（45）			2月5日〜7日	
放送（54）			〈一次〉 2月5日 〈*二次〉2月8日	
デザイン（40）			2月5日・6日	
映画（64）	1月8日〜2月5日（郵送必着）	2月4日・5日※1 2月5日・6日※2	2月12日・13日	2月21日
文芸（60）			2月12日	
演劇（40）			2月12日・13日	

＊放送学科の二次試験は一次試験合格者（発表日＝2月7日）のみ実施
※1：日本大学入試センターでの窓口出願受付（各日10：00〜16：00受付）
※2：日本大学芸術学部江古田校舎での窓口出願受付（各日10：00〜16：00受付）

【第2期】（募集人員58名）

学科（募集人員）	出願期間 郵送	出願期間 窓口受付	試験日	合格発表
写真（5）	1月8日〜2月26日（郵送必着）	2月25日・26日※1 2月26日・27日※2	3月5日	3月14日
映画（10）			3月5日・6日	
美術（5）			3月5日・6日	
音楽（6）			3月5日・6日	
文芸（10）			3月5日	
演劇（7）			3月5日・6日	
放送（12）			〈一次〉 3月5日 〈*二次〉3月8日	
デザイン（3）			3月5日	

＊放送学科の二次試験は一次試験合格者（発表日＝3月7日）のみ実施
※1：日本大学入試センターでの窓口出願受付（各日10：00〜16：00受付）
※2：日本大学芸術学部江古田校舎での窓口出願受付（各日10：00〜16：00受付）

編集後記

お陰さまにてAC027号も無事に発行することができました。ご寄稿、ご協力をいただきました皆様方にまず厚く御礼申し上げます。

私が広報委員に就任してから2年になります。昨今の大学事情から広報活動は重要な任務であり、委員長のなごやかな雰囲気のなかで広報委員会は毎回開催されます。当該号は約2ヶ月前の委員会にて編集方針が定まり、各委員が1つの紙面作りに関わってまいりました。委員としての経験の浅い私が申すのも僭越ですが、私は2つの視点で広報活動を行うように心がけております。

1つは公正な〈目〉、もう1つは若者の〈目〉です。私が所属する演劇学科には広報活動を補佐する助手が決められています。大人目線ではなく、若い方々の目線に立って本紙を創り上げて行くために若い助手の方々の〈目〉は欠かすことができません。昨年度の笹山志帆助手とは初めての広報の仕事ゆえ2人で丹念に進めてまいりました。2年目の今年は高橋小百合助手と七字紗衣助手の強力な2人体制で私を支えてくれています。彼女らほかの助手も交え、若いブレーンに囲まれてのミーティングは私にとって至福の時・・・。そして、このようにして出来上がった本紙を学生たちの手にお届けできるのもまた、先生冥利に尽きます。　感謝！

編集委員　丸茂祐佳

◉発行：日本大学芸術学部 ◉発行責任者：野田慶人
◉編集：広報委員会／委員長：佐藤洋二郎／副委員長：中町綾子／編集委員：浅井 譲／宮崎正弘／鞍掛純一／土野研治／谷村順一／丸茂祐佳／金 龍郎／長瀬浩明／高久 暁／ジュリアン・マニング／加藤弘一／樋口 肇／秋山和則／鈴木俊崇 ◉ACロゴデザイン：中島安貴輝 ◉デザイン：井原デザイン ◉印刷：(株)タスプ／箭内民生　発行2012.12